



Title	梶井基次郎「冬の蠅」論：「私の心」と周囲の＜空間＞との関わり
Author(s)	アブドエルマクスード, ワーイル
Citation	阪大近代文学研究. 2007, 5, p. 41-59
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/92646
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

梶井基次郎「冬の蠅」論

——「私の心」と周囲の〈空間〉との関わり——

アブドエルマクスード・ワール

はじめに

「冬の蠅」は、昭和三年五月当時文芸春秋社から出ていた新人作家の為の雑誌『創作月刊』に発表され、昭和六年五月に武蔵野書院刊『檸檬』に所収された。主人公の「私」が回想する形式の短編であり、序章に当たる部分・「1」・「2」・「3」の四つの部分から成る。

従来、本作は梶井の作品の中で「最もすぐれたもの」⁽¹⁾であり、「最も結晶度が高い作品」⁽²⁾であると高く評価されてきた。しかし、その多くは、作品の成立事情⁽³⁾や作家の伝記的な事実⁽⁴⁾と結び付けて、論を進めているものである。確かに、病氣養生と避寒のために湯ヶ島に出掛けた梶井と「冬の蠅」の「私」の置かれた状況の類似性について考えると、梶井の実生活を重ね合わせることも意味があるだろう。しかし、そればかりを意識するのではなく、テキストにおける他の諸要素を考慮し、「冬の蠅」の作品内部において論じる必

要があるのではないか。

勿論、今までの研究史で、作品に即した読みがなかったわけではない。しかし、そこでしばしば論じられているのは、「私」の「倦怠」や暗い〈運命〉に偏っているように思える。本作の主題に関する指摘を概観すると、福永氏は、本作を「闇の絵巻」に見られる〈絶望への情熱〉に照応し、『冬の蠅』の諧謔の文体の底にひそむ倦怠は、この絶望への情熱に裏打ちされているのだ⁽⁵⁾と指摘する。また、相馬氏は、「倦怠から発する感情の凄惨ともいうべき帰趨、『病める人間存在』のどうしようもない暗さ」⁽⁶⁾が、その主題だとしている。更に、勝呂氏は「テーマは〈倦怠〉から、〈私〉の絶望的な生の感情へと深められている」とし⁽⁷⁾、鈴木氏は、「冬の蠅が自分自身の将来を象徴していることを痛感したことが結論的に冬の蠅の主題になっている」⁽⁸⁾と指摘している。

本論では、序章から「3」までの各部分に沿って、問題となる「私」の内的な世界について具体的に考察したい。特に、テ

キストにしばしば見られる「私の心」と深く関わる周囲の〈空間〉、とりわけ私の「部屋」、〈海〉等のイメージについて検討し、「私を圧迫」して「生かさないうであらう太陽」や「私を殺してしまふきまぐれな」「其奴」といった〈他者〉としての存在に注目しながら、従来とは違う角度から「冬の蠅」を論じたい。更に、なぜ「私」は「小説を書かう」としてゐるのか、及びその行為の意味について考察する。

一、〈生活空間〉としての「私の部屋」

「私」がこの冬自分の部屋に住んでいた〈冬の蠅〉を題材に書こうとしている物語で注目されるのは、「1」と「3」の舞台が「私の部屋」という限定された〈生活空間〉となっている点である。それに対して、「2」では、「人里離れた山中」、「温泉」、「娼家」、「港」といった幾つかの舞台が設定されていることが注目される。また、終章に次の「私が自分の鬱屈した部屋から逃げだしてわれとわが身を責め虐んでゐた」というくだりがある（引用の傍線は論者、以下同じ）。更に、「2」においても次の「私は私の置き去りにして来た憂鬱な部屋を思ひ浮かべた」という一文が見られる。ここでは、何故私の部屋が「鬱屈した」「憂鬱な」影を帯びているのかという疑問が生じる。

この疑問を解決するため、主に「1」と「3」の舞台となつ

ている「私の部屋」のあり方と「私」の〈心〉との関わりについて検討する。先ず「私の部屋」のあり方が「冬の蠅」という題名と密接に関わるのではないか。〈冬の蠅〉という小さな虫は、〈生命の衰退〉をイメージさせるものとして、しばしば用いられる。例えば、萩原朔太郎の「二つの手紙」^⑧に「私は愛する、しめやかな鎮魂楽の響と、冬の日の窓にすがりつく力のない蠅の羽音を」や「力のない冬の蠅は ぶむぶむという羽音をたてて室内を飛び廻つて居ます」がある。また、「薄暮の部屋」^⑨にも「寒さにかじかまる蠅のなきごゑ」や「さめざめたる部屋の隅から つかれて床をさまよふ蠅の幽霊ぶむぶむ」等が見られる。同様に、本作品においても〈冬の蠅〉が〈生命の衰退〉のイメージを持つことが幾つかの部分から窺える。例えば、序章に当たる部分に次のような箇所がある。

よばよばと歩いてゐる蠅。指を近づけても逃げない蠅。
（中略）彼等は一体何処で夏頃の不逞さや憎々しいほどのすばしこさを失つて来るのだらう。

また、〈冬の蠅〉が牛乳の壘に落ちる場面を見てみよう。

壘の内側を身体に腑著した牛乳を引き摺りながらのぼつて来るのであるが、力のない彼等はどうしても途中で落ちてしまふ。（1）

そうした「枯死からはさう遠くない彼等が」、他所の部屋ではなく、「病人である私」の〈部屋〉に住んでいる。つまり、

「病人である私」と「生命の衰退」の象徴である（冬の蠅）から、「私の部屋」が（生命力）を感じさせない空間として設定されていることが分かる。このような私の部屋のイメージを（窓）の外の「昆虫」の世界と対比してみよう。

やつと十時頃溪向ふの山に堰きとめられてゐた日光が閃々と私の窓を射はじめる。窓を開けて仰ぐと、溪の空は蛇や蜂の光点が忙しく飛び交つてゐる。（中略）彼等はさうして自分等の身体を溪の此方岸から彼方岸へ運ぶものらしい。昆虫。昆虫。初冬といつても彼等の活動は空に織るやうである。（中略）私は開け放つた窓のなかで半裸体の身体を晒しながら、さうした内湾のやうに賑やかな溪の空を眺めてゐる。（一）

この部分から、（外界）で活発に飛び回る「昆虫」と、（室内）において（生命の衰退）を象徴する（冬の蠅）及び「病人である私」とが対照的であることが分かる。また波線部のように、（窓）がそうした賑やかな（外界）と（室内）を確然と区別する（中間領域）として機能している。換言すれば、あたかも（窓）がはつきりとした（境界）のように設定されている点が注目される。一方で、日光浴の際そこで半裸の身体を晒したり、「さうした内湾のやうに賑やかな溪の空を眺めてゐたりすることから、「私」と（外界）とを繋げる機能もあると言える。つまり、「一」の冒頭における「私の窓」は、（外界）と（室内）を区別する（境界）の機能と、「私」と（外

界）を繋ぐ（通路）という二通りの機能があると言えよう。

このように、「彼等から一篇の小説を書かうとしてゐる」「私」が「一」のこの部分で（室内）と（戸外）を強く意識していることがわかる。先行研究の多くは、（室内）の（冬の蠅）と「私」の類似性に着目している。しかしそれだけではなく、ここでは寧ろ（戸外）に対して、「病人である私」と「枯死からはさう遠くない彼等」が（生命の衰退）した一つの室内空間を作り上げていることを指摘したい。

また「私の部屋」は、もう一つ重要なイメージをもつ。それは「私」の（心）に（廓寥）や（孤独）感を与えるものである。例えば、それは「一」の最後の部分に見られる。

彼等が今や凝つと天井にとまつてゐる。それはほんたうに死んだやうである。さうした、錯覚に似た彼等を眠るまへ枕の上から眺めてみると、私の胸へはいつも廓寥とした深夜の気配が沁みて来た。（中略）——天井の彼等を眺めてみると私の心はさうした深夜を感じる。（傍点は、梶井）

ここで、死んでいるように部屋の天井にじつと止まつている「彼等」は、「私の心」にがらんとした深夜の（寂しさ）を感じさせている。更に、次の部分を挙げてみよう。

深夜のなかへ心が広がつてゆく。そしてそのなかのただ一つの起きてゐる部屋である私の部屋。——天井に彼等のとまつてゐる、死んだやうに凝つとまつてゐる私の

部屋が、孤独な感情とともに私に帰つて来る。(1)

この部分においても、「私の部屋」が「孤独な感情」を伴う空間として語られている。そうした「生活空間」としての「部屋」が「私の心」に〈空虚感〉を抱かせていることがとりわけ「1」で強調されている。更に、「部屋」の範囲を越え、「溪間の旅館」についての次の引用を見てみよう。

冬ざれた溪間の旅館は私のほかに宿泊人のない夜がある。そんな部屋はみな電燈が消されてゐる。そして夜が更けるにしたがつてなんとなく廃墟に宿つてゐるやうな心持を誘ふのである。(1)

この部分からも、「旅館」全体が〈荒廃〉した空間のようなイメージを持つていることで、「私の心」に呼応していることが窺える。

以上から、「私の部屋」には主に二つの表象があることが言える。一つは、「病人である私」と「枯死からはさう遠くない」(冬の蠅)を宿していることで〈生命の衰退〉した空間として描かれていること、もう一つは、「私の心」に〈空虚感〉や〈孤独〉感を与えることである。

このように「冬の蠅」の「1」は、「私の」旅館の「一室」に対する意識の叙述に終始する。そうした「私の部屋」のあり方が「私の心」に影響を与えているのではないか。というのは、テキストにしばしば見られる「私の倦怠」は、以上のよ

うなイメージを持つ「私の部屋」と深く関わっていると考えられるからである。「冬の日」には主人公の堯が外出の帰りに外から自分の部屋を見て次のように思う箇所がある。

「俺が愛した部屋。俺が其処に棲むのをよろこんだ部屋。あのなかには俺の一切の所持品が——ふとするとその日その日の生活の感情までが内蔵されてゐるかもしれない。」(三)

ここで、「部屋」は所持品だけでなく、自分の感情までを内包しているとされる。つまり、部屋が主人公の堯の〈心〉のメタファーとして描かれていることが分かる。ただし、「冬の蠅」の場合、「私」は「冬の日」の堯と違って自分の部屋を「鬱屈した」「憂鬱な」空間と捉えている。それは、これまで見てきた「私の部屋」の〈生命力〉を感じさせないイメージがあるためだけではなく、「私の部屋」及び「溪間の温泉宿」を含む「山間」という場所全体に対する「私」の心情に関係しているのではないか。先ず「冬の蠅」の「2」からの次の部分を見てみたい。

山や溪が塚ご合ひ心を休める余裕や安らかな望みのない私の村の風景がいつか私の身についてしまつてゐることを私は知つた。そして三日の後私はまた私の心を封じるために私の村へ帰つて来たのである。

この部分では、「私の部屋」を越えた溪や山を含む村という空間全体が「私の心を封じる」イメージを持つ。更に、「1」からの次の一文も見よう。「私は好んでこんな山間にや

つて来てゐる訳ではなかつた。私は早く都会へ帰り度い」とある。ここでも、「私」の「山間」という空間に対する好意的ではない心情が明示されている。つまり、「私の心」は「生命力」を欠いた旅館の〈部屋〉だけではなく、溪や山や村全体という居住している空間とも調和しないことが分かる。したがって、そうした周囲の空間に対する心持ちが「2」で見られる〈脱出〉という行為と深く関わっていると考えられる。

二、「解放」のための〈脱出〉

ここでは、圧迫されている私の〈心〉について考察したい。「2」に次のような箇所がある。

私は疲れてゐた。それから溪へ下りてまだ三四丁も歩かなければならない私の宿へ帰るのがいかにも億劫であつた。そこへ一台の乗合自動車を通りかかつた。それを見ると私は不意に手を挙げた。(中略)私の村へ帰るにも次の温泉へゆくにも三里の下り道である。そこへ来たとき、私はやつと自動車を止めた。そして薄暮の山の中へ下りてしまつたのである。何のために？ それは私の疲労が知つてゐる。(2)

ここで見られる「不意に」「手を挙げ」て乗車し、明確な理由もなく「山の中」で下車する「私」の行為には、どのような意味があるのか。それは、先に取り上げた「私の部屋」や

「溪や山」や「私の村」等といった場所から身を遠ざけることが主因なのではないかと思われる。「私」が通りかかる自動車に「不意に」手を挙げたことは、予めそのような希望を持っていたからであらう。つまり、乗車した時からそういう意識があつたと考えられる。

また、この作品で注目されるのは、語り手の「私」が自身の〈病〉について詳しくは語らないことである。ただ、快復して「早く都会帰りたい」「私」は、身を日光に晒すという医者の子供の課した治療方法に従うしかない。この「私」の状況は「旅館の一室」に〈束縛〉されているようなものである。それは、例えば次の部分から窺える。

溪間の温泉宿なので日が翳り易い。溪の風景は朝遅くまでは日影のなかに澄んでゐる。やつと十時頃溪向ふの山に堰きとめられてゐた日光が閃々と私の窓を射はじめる。(1)

この傍線部から、日光浴をするために部屋に日光が入り込んで来るのを朝から待ち構えている「私」が、如何に時間をかけているかを察することができるだらう。また、〈戸外〉からの日光が〈室内〉に入ってくるのを待つ「私」は、ただ自分の部屋で待つことしか出来ない存在のようである。それでも、快復に向かわない「私」は次のような気持ちを抱く。

結局は私を生かさないうであらう太陽。しかもうつとりとした生の幻影で私を瞞さうとする太陽。おお、私の太陽。

私はだらしない愛情のやうに太陽が癪に触つた。裘のやうなものは、反対に、緊迫衣のやうに私を圧迫した。狂人のやうな悶えでそれを引き裂き、私を殺すであらう酷寒のなかの自由をひたすらに私は欲した。(一)このやうに、「私」は「風景に愛情を与へ、冬の蠅を活気づけ」る太陽が、自分を誘惑すると同時に圧迫感を与える存在として捉えている。この点から、太陽を「私の心」を自由にしない(他者)であるかの様に位置付けることができるのではないか。さらに、「太陽」に対して激怒する次の場面も見てみよう。

「平俗な日なた奴！ 早く消えろ。いくら貴様が風景に愛情を与へ、冬の蠅を活気づけても、俺を愚昧化することだけは出来ぬわい。俺は貴様の弟子の外光派に唾をひつかける。俺は今度会つたら医者に抗議を申し込んでやる」(一)

ここでは、そのような存在としての「太陽」に対する「私」の抑えきれない憤慨や「拒否感」が明示されている。「私」が「太陽」だけではなく、日光の下で自然描写を試み、明るい色調を用いた「外光派」とされるフランスの画家たちをも「拒否」の対象としている点は、特に注目される。更に、「私」のそのような思いと共通する次の部分を見てみよう。

私は日の当つた風景の象徴する幸福な感情を否定するのではない。その幸福は今や私を傷つける。私はそれを憎

むのである。(一)

「私」には、「幸福な感情」に対する「否定」の気持ちはないものの、快く受け入れられないのである。

ところが、「私の心」を「圧迫し」ているのは、「私を生かさないうであらう太陽」だけではない。それと同じように「私を解放しな」い「疲労」に注目したい。「冬の蠅」作中に「疲労」という言葉は七回見られ、そのなかで「私の『疲労』」という表現が四回含まれる。また、作者がわざわざ「疲労」とかぎ括弧を付けて書いていることは見過ごせないものである。このことから、「疲労」が本作品のキーワードとして設定されていると考えられる。次の一文を見てみよう。

私は早く都会へ帰り度い。帰り度いと思ひながら二た冬もあてしまつたのである。何時まで経つても私の「疲労」は私を解放しなかつた。私が都会を想ひ浮かべるごとに私の「疲労」は絶望に満ちた街々を描き出す。それは何時になつても変改されない。(一)

この部分では、如何に「私」が「内部」から来る「圧迫」感のような「疲労」に縛られているかがよく分かる。そうした「私の疲労」は、「冬の蠅」が牛乳の壘に落ちる場面の最後を想起させる。

壘の内側を身体に腑著した牛乳を引き摺りながらのぼつて来るのであるが、力のない彼等はどうしても途中で落ちてしまふ。(中略)そして案の定落ちてしまふ。それ

は見えてゐて決して残酷でなくはなかつた。しかしそれを助けてやるといふやうな気持は私の倦怠からは起こつて来ない。(1)

ここで見られる「私の倦怠」が先に揚げた「私の疲労」と違うものであるが、両者が「私の心」を自由にしないものとして語られている。「2」に「犇ひしと迫つて来る絶望に似たものはだんだん私の心に残酷な欲望を募らせて行つた。疲労または倦怠が一たんさうしたものに變つたが最後」とある。ここで「疲労」と「倦怠」は〈同義語〉のように使われている。そうした「私の疲労」や「私の倦怠」は、「冬の蠅」の読解において見落とせないところである。このように、主人公は、「私を圧迫し」て、自分の〈心〉にのしかかっている「疲労」や「倦怠」からの「解放」を目指しているのではないか。そのような「意志」が、「私」が通りかかった一台の自動車に「不意に手を挙げ」て乗車した行為の背後にあったと考えられる。

ここで、「自動車」の存在に注目したいと思う。次の引用箇所を見てみよう。

その自動車は村の街道を通る同族のなかでも一種目だった特徴で自分を語つてゐた。暗い幌のなかの乗客の眼がみな一様に前方を見詰めてゐる事や、泥除け、それからステップの上へまで溢れた荷物を麻縄が車体へ縛りつけてゐる恰好や——そんな一種の物ものしい特徴で、彼等

が今から上り三里下り三里の峠を踰えて半島の南端の港へ十一里の道をゆく自動車であることが一目で知れるのであつた。(2)

ここで、乗客の様子や「泥除け」や「溢れた荷物」を運搬している自動車の格好は、憂鬱な部屋で単調な養生の日々を送っている「私」の普段の生活とは、大きくかけ離れたものとして描かれている。「私」が自動車に惹かれる理由の一つは、そうした〈非日常性〉にある。更に、「魔女の跨つた箒のやうに、自動車は私を高い空へ運んだ」という一文は、この自動車の有する〈非日常的〉なイメージを強調している。そして、郵便局の帰りに疲れ切つた「私」は、自動車に乗ると、次のように感じる。

私には何の感想もなかつた。ただ私の疲労をまぎらしてゆく快い自動車の動揺ばかりがあつた。(2)

ここでは、先ず「快い自動車の動揺」が「私の置き去りにして来た憂鬱な部屋」と対照的な〈空間〉として描かれている。また、その自動車の快い「動揺」は「私」が部屋で日光浴の後に感じる〈静〉としての「虚無的な疲れ」とコントラストを成す。だが、「私の心」に潜在する「解放」への「意志」は「まぎらし」てゆく程度にとどまらないのである。以下の引用には、乗車中の「私の心」の働きが明確に表れている。

私はだんだん「意志の中ぶらり」に興味を覚えて来た。

そして、それはまたそれで、私の疲労をなにか変つた他のものに変へてゆくのだつた。(2)

ここでは、これまで「絶望に満ちた街々を描き出」したり、いつまでも「私を解放しなかつた」「疲労」が、実際に違つたものになり始める。ところが、「私」は急に自動車を止め、次のような行動をとる。

そして薄暮の山の中へ下りてしまつたのである。何のためか？ それは私の疲労が知つてゐる。(2)

この部分で語り手の「私」は自分が「山の中」で下車したことに對して「何のために？」と自問する。この点については、「私」が「解放」を必要としたためだと本項の最初で述べた。ここでは、何故夜の寒い「山の中」で下車するのかという点から、更に考察を進めたい。先ず考えられるのは、「私」は「疲労」から「變つた他のもの」(傍点は、論者)の曖昧さを解消し、更に明瞭に区別できるものに展開させようとしている可能性である。更に言うなら、「私」は「快い自動車」の中で体験した「非日常性」を一層求めて「人里離れた山中」で下車したのではないか。では、「私」はどのようなものから「非日常性」を感じ取るのだろうか。「谿の眺め」に関わる次の部分を見てみよう。

最後にたうとう谿が姿をあらわした。杉の秀が細胞のように密生している遙かな谿！ 何といふそれは巨大な谿だつたらう。(中略) 眩暈を感じさせるやうな谿底には

丸太を組んだ轎道が寒ざむと白く匍つてゐた。(中略) 水を打つたやうな静けさがいまこの谿を領してゐた。何も動かず何も聴こえないのである。その静けさはひよつと夢かと思ふやうな谿の眺めになほさら夢のやうな感じを与へてゐた。(2)

傍線部から分かるように、とうとう姿をあらわした「夢かと思ふやうな谿」は、独特なイメージをもつて「私」を惹きつけ、「非日常性」を感じさせている。このことは、「遙かな谿！」の感嘆符にも表れている。しかし、「私」に「非日常性」を感じさせるのは、「谿の眺め」だけではない。寒い夜の山中に置かれた「私」の身体の変化も見逃せない。例えば、普段なら「宿では夕飯の用意が」されているはずである。だが、今夜「私」が体験する山の「極端な寒さのなかで起る身体の変調」や「空腹」のような感覚も正に「非日常的」である。更に、ここで「山の凍てついた空氣のなかを暗をわけて歩き出し」ている「私」の「暗」の発見も重要だろう。次の箇所を見てみよう。

一つの燈火も見えない暗といふものも私には変な氣を起させた。それは灯がついたといふことで、若しくは灯の光の下で、文明的な私達ははじめて夜を理解するものであるといふことを信ぜしめるに充分であつた。(2)

この部分にも「私」に闇を理解するという「非日常的」な経験が見られる。従来の研究では「闇」について、『闇』は生

死をも呑み込み、生命の根源としてのカオスである」⁽¹¹⁾、

または「光と暗、生と死といった二項対立そのものを包み込む『闇』は、生命の根源を意味している」⁽¹²⁾といった見方がなされてきたが、ここでは違う観点から「闇」に触れてみたい。寒い夜の山中で歩き出している「私」は次のように感じている。

あたりは寒い闇に包まれ、空腹した私が暗い情熱に溢れて道を踏んでゐた。「何といふ苦い絶望した風景であらう。私は私の運命そのままの四圍のなかに歩いてゐる。

これは私の心そのままの姿であり、ここにゐて私は日なたのながで感じるやうな何等の欺瞞をも感じない。(後略) (2)

先ずこの部分で注目したいのは、傍点で「闇」が「私の運命」と重ねられていることである。つまり、快復しない「私」として、「闇」や「運命」は望みや期待を完全に絶つものである。また、「病人である私」の〈力〉を超越している点でも共通している。「私」が「闇」の中で歩き出す行為は、単なる憂鬱な部屋や「私を解放しな」い「疲労」と「倦怠」から〈脱出〉できるということの意味するだけではなく、より心理的な側面にも関わるだろう。それは、後に詳述したい。更に、傍線部の眼前の風景と〈心〉の姿、また〈外部〉を包む傍点部の「闇」と「暗い情熱に溢れて」いる主人公の〈心〉とは同一化している。ここで、〈外部〉の空間が持つ「暗い」

陰影が〈心〉に染みてくることが見られる。恰も、「私」の〈心〉と〈外部〉の境界が解消されているようである。また、語り手の「私」が眼前の風景に自分の〈心〉を投影しているとも言えよう。最後の波線部に、「私を生かさないうであらう太陽」から〈脱出〉し、「山の凍てついた空気のなか」で下車した行為の重要性が窺える。そして、そうした「風景」の中でクライマックスを迎えて、次のような情景がある。

私の神経は暗い行手に向つて張り切り、今や決然とした意志を感じる。なんといふそれは気持のいいことだらう。定罰のやうな闇、膚を劈く酷寒。そのなかでこそ私の疲労は快く緊張し新しい戦慄を感じることが出来る。歩け。歩け。へたばるまで歩け。

私は残酷な調子で自分を鞭打つた。歩け。歩け。歩き殺してしまへ。(2)

ここでは、先ず「解放」への「意志の中ぶらり」が「決然とした意志」へと、また「私の心を解放しなかつた」「疲労」が「曖昧性」を帯びた「変つた他のもの」から、はつきりとした「快く緊張し新しい戦慄」へと変化することに注目したい。そして、これこそが「私」が山の中で歩き出す、あるいは〈脱出〉する行為の目的だと言えるであらう。また、波線部で見られる「わが身」を苛む行為に触れてみたい。鈴木靖浩氏は「私」のそうした行為について次のように述べる。

昼間の病鬱を振り切ろうとするかのように「歩き殺して

しまえ」と歩いて行く先に（半島の南端）の（港）があった。「歩き殺してしまえ」というように「死」という絶望へと自分から進んでいくのだ。（13）

だが、直前のテキストから考察すると、「歩き殺してしまえ」という表現には「緊張」及び「新しい戦慄」を一層感じるために、自分の身を苛んでも、歩き出そうとする意志を読み取るべきではないかと思われる。また、「1」で見られる「自分等の身体を溪の此方岸から彼方岸へ運」んだり、「彼等の活動は空に織」ったりしている蛇や蜂や、日向の中で元気に遊んでいる（冬の蠅）と対照的に描かれていた主人公には、このような（脱出）の試みによつて活気、快活な状態があることを感じられるのである。

以上、「私」が「闇」の中で歩き出す行為によつて、単に「私の憂鬱な部屋」や「疲労」等から（脱出）することが出来るだけではなく、他の（心的）な問題に対処していると述べた。それは「腑甲斐ない」「私」という自己認識の問題と関わる。作中では「私」が自分を弱くて頼りなく意気地のない存在として認識していることが窺える。例えば、次の引用部分を挙げられる。

私は腑甲斐ない一人の私を、人里離れた山中へ遺棄してしまつたことに、気味のいい嘲笑を感じてゐた。（2）
ここで、自分を意気地がないと思つていことが分かる。さらに、これを強調する次の場面も見てみよう。

・樫鳥が何度も身近から飛び出して私を攫るかした。（2）
・このままで日が暮れてしまつてはと、私の心は心細さで一杯であつた。幾たびも飛び出す樫鳥は、そんな私を、
近くで見る大きな姿で脅かし（後略）。（2）

こうした語り手「私」の自己認識に関わる語り方は、如何に自分の存在を意識しているかを明らかにしている。先ずそれは樫鳥によつて強調されることから、樫鳥が「私」の（心）の一面を明示する道具として設定されていると言えるのではないか。寒い夜の「山の中」で一人で歩き出す「私」の行為は、樫鳥の脅かしによつて強調されたそのような自己認識を変更する試みとして捉えられる。言い換えれば、「私」は（脱出）する行為によつて、「定罰のやうな闇、膚を劈く酷寒」の中で「わが身」を苛み、「残酷な調子で自分を鞭打」つことによつて「病人」である自分に負けない忍耐力を確認すると考える。そして、そのような「私の心」を満たす（脱出）が自己認識にも影響を与えていると言えるだろう。

以上のように、「憂鬱な部屋」や「廢墟」のような「旅館」から（脱出）し、「闇」の中を歩き出す行為によつて、「私の心」にのしかかっている「倦怠」及び「疲労」を「快い緊張」や「新しい戦慄」に変えることが出来るだけではなく、「私の日課」からも解放され、（非日常性）を体験することも出来る。こうしたことを強調するのは、次の「ほんたうにそれらは回想といふ言葉に相應しい位一晚の経験としては豊富す

ぎる内容であつた。」という一文である。先ず、そのような「一晚の経験としては豊富すぎる内容」が先に述べた（非日常性）を強調する箇所である。また、そうした普遍感じられない感情を「私の心」に喚起させるのは、目的地である「半島の南端の港」乃至は「海」なのではないかと思われる。

三、「海」と私の「内輪」

本項では、「海」について考察したい。「海」もまた、主人公の（心）と深く関わる場所である。「2」の最後に「私」が村人の混み合っている共同湯で一休みをしてから、もう一度「夜の道へ出る」とあるが、次のようなことが起こる。

その道でたうとう私は迷つてしまひ、途方に暮れて暗のなかへ蹲まつてゐたとき、晚い自動車が通りかかり、やつとのことでそれと呼びとめて、予定を変へてこの港の町へ来てしまつたのであつた。（2）

先ず何故「港の町」なのか。この点を検討するためには、「私」が「港の町」につくまで抱いていた「海」のイメージの検討が必要だろう。従来の研究では、渡部氏は「幸福のイメージを『海』に託していたとは考えられなくも無い」⁽¹⁴⁾と述べるが、氏の指摘は一般論に留まつており、どのような「幸福」なのかは論じられていない。また、中沢氏は「海」のイメージについて次のように述べている。

草稿の中には「海のやうな暗が私を取巻いてゐる」「海のやうな暗のなかを歩いてゐた」といった文章も登場する。「海」のイメージはここでは「闇」に重ねられている。そこにおいて渡部氏のいう「幸福のイメージを『海』に託していた」という一元的な把握の仕方は検討を要することになるだろう。⁽¹⁵⁾

右のように、氏は「冬の蠅」の草稿における「海」が「闇」のイメージを持つことを主張する。しかし、氏が草稿に見られる「海」のイメージから、作品「冬の蠅」における「海」に「幸福のイメージ」があるという先の渡辺氏の指摘に反論しているという点で、ズレが生じている。要するに、作品としての「冬の蠅」とその草稿の区別や違いを重視する必要があるのではないかと思う。完成稿としての「冬の蠅」を草稿と異なる、一つの独立した世界と考えるべきである。更に、鈴木氏は次のように述べている。

海のイメージには、自我を包み込むやうな幸福なイメージと全てを飲み込む恐ろしいイメージが重なり合っている。⁽¹⁶⁾

右の引用から、氏は「幸福」と「恐ろし」さ、すなわち両極のイメージを「海」に託した見方を示している。

さて、「冬の蠅」に見られる「海」の表象を見てみよう。溪の空は虹や蜂の光点が忙しく飛び交つてゐる。（中略）私は開け放つた窓のなかで半裸体の身体を晒しながら、

さうした内湾のやうに賑やかな溪の空を眺めてゐる。

(1)

右のように、昆虫の飛び交う「賑やかな溪の空」は、船が忙しく行き来している「内湾」に喩えられている。従つて、「私」の認識では「海」が「生命力」と結び付いていることが言えるのではないかと思われる。また、そのような「海」は、「がらんとした溪間の旅館の一室」で生活を送っている「病人」である「私」の「憧憬の対象」ともなることが考えられる。更に、「私」を締めくくる段落は、「眠れなくなると私は軍艦の進水式を想ひ浮べる。」という一文で始まっている。ここでは、「私」が自分の「心」を落着かせ、眠りにつくために、先ず思い浮かべるのは「海」で行われる「軍艦の進水式」なのである。また「軍艦の進水式」が「賑やか」であることで、以上の「内湾」のイメージとも共通している。つまり、「私」が「海」に「賑やかな」イメージを託していると言えるのではないか。「私」が三里の道を歩いて次の温泉へ行くことを決心した箇所も見てみよう。

あたりがとつぷり暮れ、私がやつとそこを立上つたとき、私はあたりにまだ光があつたときとは全く異つた感情で私自身を艤装してゐた。(2)

傍線部の表現で「船体が完成したあと就航に必要な種々の装備を船に施すこと」(17)を意味する「艤装」を「私自身」に對して使用する点が特に論者の目を引くところである。語り

手が自分を就航する船に喩えることから、「海」を意識しながら「山の中」を歩いていることが窺える。この点を以上に述べたことと合わせて考察すると、「私」は「生命力」に富む「賑やかな」空間としての「海」を求めて歩いていることが分かる。更に、「海」に着くと、次のような〈心〉の働きが見られる。

永い絵巻のやうな夜の終りを感じてゐた。舷の触れ合う音、とも綱の張る音、睡たげな船の灯、すべてが暗く靜かにそして内輪で、柔やかな感傷を誘つた。(2)

先ず傍線部の「永い絵巻のやうな夜」は、「私」が郵便局の歸りに乗つた自動車を降りた後「山の中」を歩き出し、「港のありか」まで着いて来た一夜のことを指しているだけではなく、比喩的な表現として捉えられる。というのは、「海」にやつて来たことによつて、これまで「私」を苦勞させてきた「疲勞」や「倦怠」や「太陽が癪に触」ることや「反對に、緊迫」衣のやうに私を圧迫し「いた」^{イライラ}「袈のやうなもの」等といった不快にさせることにけりが付いたというやうに解釈することもできる。これを裏付けるのは、傍線部に見られる「私」の「内輪で、柔やかな感傷を誘つた」という表現である。

また、ここで注目し値するのは、これまで〈想像〉してきた「賑やか」で〈生命〉に富んだ場所としての「海」と、〈現実〉の「靜かな海」のイメージが異なることである。だが、

相違があつたとはいへ、「私」は反感を起こしていない。逆に、「私」はそのような「静かな海」の前でこそ「柔やかな感傷」を感じるため、夜の「現実の海」が「私」に「落ち着き」を感じさせる場所として機能するのである。それを強調するのは、日光浴する私の「太陽」に対する「憎悪」についての次の引用部分である。

・この不快感は日光浴の済んだあとなんとも云へない虚無的な疲れで病人を打ち敗かしてしまふ。恐らくそれへの嫌悪から私のさうした憎悪も胚胎したのかも知れないのである。(1)

・しかし私の憎悪はそればかりではなく、太陽が風景へ与へる効果——眼からの効果——の上にも形成されてゐた。

(1)

・日に当りながら私の憎悪はだんだんたかまつてゆく。

(1)

以上の「私の憎悪」は、「私」が「海」に着くと、次のようにすつかりなくなる。

いづれにしても私の憎悪に充ちた荒々しい心はこの港の埠頭で盡きてゐた。(2)

このように、「私の心」と深く関わっている「外部」としての「海」は、「1」で見られる「私を生かさないうであらう太陽」と対照的に設定されていることが明瞭である。夜の「海」のイメージを一層掘り下げるために、次の箇所を見てみよう。

・もやひ網が船の寝息のやうにきしり、それを眠りつかせるやうに、静かな波のぼちやぼちやと舷側を叩く音が、暗い水面にきこえてゐた。(2)

・私は静かな眠つた港を前にしながら転変に富んだその夜を回想してゐた。(2)

・舷の触れ合ふ音、とも綱の張る音、睡たげな船の灯、すべてが暗く静かにそして内輪で、柔やかな感傷を誘つた。

(2)

・静かな空気を破つて媚めいた女の聲が先ほどから岸で呼んでゐた。(2)

・ながい間私はそこに立つてゐた。気疎い睡気のやうなものが私の頭を誘ふまで静かな海の暗を見入つてゐた。

(2)

これらの部分から、「私」の「荒々しい心」の「憎悪」を解消する「海」のイメージの基底部を支えているのは、「静か」であることが分かる。また、これが以上に見てきた「非日常性」を感じさせる「ひよつと夢かと思ふやうな谿の眺めになほさら夢のやうな感じを与へてゐた」「静けさ」と重なることに注目したい。だが、以上の「静けさ」が旅館の「がらんとした」様子と違ふことに留意すべきである。先ず、次の部分を見てみよう。

冬ざれた溪間の旅館は私のほかに宿泊人のない夜がある。(中略)そして夜が更けるにしたがつてなんとなく

廢墟に宿つてゐるやうな心持を誘ふのである。(1)

この部分から、山の静けさが如何に「私」に廢墟の氣持ちを抱かせるかが明瞭に窺える。次に、「2」を締めくくる「私」の村の風景に関する次の部分と合わせてみたい。

山や溪が塚ぎ合ひ心を休める余裕や安らかな望みのない私の村の風景がいつか私の身についてしまつてゐることを私は知つた。そして三日の後私はまた私の心を封じるために私の村へ歸つて來たのである。(2)

ここでも「がらんとした溪間」の「静けさ」の背後には、「山や溪が塚ぎ合」つたり「心を休める余裕」がなかつたりすることが見られる。従つて、先の夜の「海」や「ひよつと夢かと思ふやうな谿」の「静けさ」が、「山」の「静けさ」と正反對であることが言える。更に、以上のような「静かな海」という場所は「心を封じる」「私の村」と対照的に設定されていることが窺える。とすれば、何故「私」がそのような「村」に歸るのか、という疑問が生じる。その回答は次の部分に見出せると思う。

明るい南の海の色や匂ひはなにか私には荒々しく粗雑であつた。その上卑俗で薄汚い平野の眺めはすぐに私を倦かせてしまつた。(2)

ここで、「私」はこれまで抱いてきた「海」に関する「想像」、すなわち「賑やか」で「生命」に富んだ「内湾」や活気のある「進水式」の雰囲気と、(現実)の「明るい南の海」

の間には食い違いがあるため、以上のような思いをして「私の村」に歸ることを決めた。更に、以上に見てきた「私」の「心」を惹き付けている「静かな海」の光景は、すべて「夜景」であつたが、それは港町の「日中」の「海」の光景と正反對に機能していることがこの箇所で強調されるのである。前項で「暗」の問題に触れたが、ここでも更に「暗」の違つた側面を発見することが出來た。要するに、ここで「暗」を通して如何に「私」の中での「海」の光景に対する氣持ちが變つて來るのが明瞭に窺える。

このように、「私の心」と深く関わる「海」について検討することで、何故「私」が「南端の港」の方に歩き出していたのか、何故「港の町」に着くように設定されているのか、明らかにになる。また、「暗」の重要性が一層強調される。更に、以上のように見て來た夜景の海が有している「作用」によつて、「私」の「解放」への「脱出」の目的が達成されると言えるのではないか。言い換えれば、前項で取り上げた「解放」への「脱出」の過程においては「海」が主要な役目を果たしているのである。

四、〈他者〉としての「其奴」

「冬の蠅」の「3」では、「私」が自分の部屋へ歸つて数日後「ふと自分の部屋に一匹も蠅がゐなくなつてゐることに氣

がつくこと、及びそれに対する「私」の反応が中心に描かれている。従来の研究における「冬の蠅」の「3」に関する見解には諸説がある。例えば、相馬氏は「第三節は、『この物語の起承転結をととのえるための単なる手段といつても必ずしも過言ではないようなものであり、作品の重点はあくまでも第一節・第二節』⁽¹⁸⁾にあると主張する。また、渡辺氏は、「3」に関して、「結の部分は短い」⁽¹⁹⁾と述べ、第三章そのものの意味については言及していない。これに対して、飛高氏は「梶井基次郎の文学の展開過程の上に『冬の蠅』を据えてみた場合には、第三章を『この物語の起承転結をととのえるための単なる手段』とはいいいえないであらう」と反論し、『冬の蠅』の末尾に無常観を見ると記し⁽²⁰⁾ている。確かに、氏が指摘する様に「冬の蠅」の「3」には単なる結び以上の意味があると思うが、論者はそれを飛高氏とは異なった角度から取り上げたい。次の箇所を見てみよう。

私はそのことにしばらく憂鬱を感じた。それは私が彼等の死を傷んだためではなく、私にもなにか私を生かしそ
しいいつか私を殺してしまふきまぐれな条件があるやう
な気がしたからであつた。(3)

ここで、「私」は「冬の蠅」の「死」という「私を充分驚ろかした」出来事に対して傍線部のように反応する。何故「私」は蠅の死を発見した時、このような「空想」をするのだろうか。結論から言えば、そのような「空想」が「私を殺すであ

らう」(へもの)を絶えず意識していることから生じていると思われる。つまり、「蠅がゐなくなつてゐることに気がついた」ことが切つ掛けとなつてゐるのだが、そもそも自分を殺してしまふ(へもの)があるという(想念)は以前から私の念頭にあつた。そのようなことは、「結局は私を生かさないうであらう太陽」(2)や「私を殺すであらう酷暑」(2)という表現に見出せる。

このように、主人公の「私」が、ただ「日光浴の際身体を受ける生理的な変化」を感じたり、「蠅がゐなくなつてゐることに気がつく」ことだけで、直ぐにそのように思つてしまふのは、そうした「私を殺す」(へもの)があるという(想念)が自分の(へ心)から離れないからである。また、以上の「きまぐれな条件があるやうな気がした」や「私は其奴の幅広い背を見たやうに思つた」という言い回しは如何に「私」がその(想念)にとらわれているのかを明瞭に示しているのである。

そうした「私を殺す」(へもの)は、「2」で「溪の空」を照らしている「太陽」と設定されているが、「3」においては、それを眼で見る事ができないため、最初に(へ心)の中で「何か」として認識するが、後にそれを「其奴」と呼ぶのである。

「二、「解放」への(脱出)」で触れたように、結局「私を生かさないう」「太陽」は、「私」が拒否する(他者)のような存在であると指摘した。ここでも、「いつか私を殺してしまふ

きまぐれな条件がある」「其奴」(傍点は、論者)について同じことが言えるのではないか。つまり、「其奴」は「私を殺してしまふ」存在として描かれており、更に「幅広い背」を有していると設定されていることから、自分の〈力〉を超えたり、「私」の〈拒否感〉を喚起したりする〈他者〉と言っても過言ではない。そういう意味で「太陽」と「其奴」が同じように機能しているのではないかと思われる。

また、「語り口」から「太陽」と「其奴」に対する「私」の心情が明瞭に窺える。例えば、「其奴」という言葉は、その〈もの〉をぞんざいに指し示す言葉である。それもまた、「2」に見られる『平俗な日なため！早く消える。いくら貴様が風景に愛情を与へ、冬の蠅を活気づけても、俺を愚昧化することだけは出来ぬわい。俺は貴様の弟子の外光派に唾をひつつける。』等といった乱暴な口調は、如何に「私」が「太陽」を拒否しているのかを示している。更に、「私を殺すであらう」〈もの〉があるという「空想」は、「私」の〈身体〉が異常に疲れている時に思い浮かんで来るものである。例えば、前述したように「日光浴の際身体の受ける生理的な変化」を感じた時「太陽」が「私を生かさないうであらう」と「私」は感じている。また、「私を生かしそしていつか私を殺してしまふきまぐれな条件がある」「其奴」のことを思い浮かべたのは、「私は何日も悪くなつた身体を寢床につけてゐなければならなかつた」時であつたことは見落とせない。

つまり、このような「空想」が〈身体の衰弱〉から生まれることが分かる。

次に、「3」に見られる「私を殺してしまふ」「其奴」に対する「私」の反応について考察したい。作品を締めくくる次の重要な箇所を見てみよう。

それは新しいそして私の自尊心を傷つける空想だつた。

そして私はその空想からますます陰鬱を加へてゆく私の生活を感じたのである。

ここで、そのような〈他者〉としての「其奴」に殺されてしまふと思うため、「腑甲斐ない」「病人である私」の「自尊心」が傷付くことは言うまでもない。ただし、「私の生活」が「ますます陰鬱を加へてゆく」のは、そのためだけではない。つまり、この温泉宿での療養生活をしながら「日課のやうに」眺めていた〈冬の蠅〉が居なくなつたため、「私」の〈孤独〉感が一層増して行くと考えられる。だが、自分の好奇心をそそる〈冬の蠅〉が死んでも、また「がらんとした旅館」での孤独な生活が一層憂鬱になつても「私」は負けないのである。そのような姿は、「早く都会へ帰り度」くても、いくら養生生活が孤独で憂鬱であつても、「港」の附近から「がらんとした旅館の一室」へそのまま帰ることから窺える。さらに、「私」は孤独な養生生活乗り越えるために、〈冬の蠅〉の代わりに自分の好奇心をそそる新しい対象を見つけようとする。それは、本作品の序の最後に当たる次の「それが冬の蠅

である。私はいま、この冬の私の部屋に棲んでゐた彼等から一篇の小説を書かうとしてゐる」という一文から分かる。傍線部で見られる「小説を書かうと」することが「ますます陰鬱を加へてゆく私の生活」を乗り越えるための新しいことになる。また、小説を書く行為自体が「いつか私を殺してしまふ」「其奴」に対する一種の抵抗であり、自分の〈生〉への追求を明白に示していると考えられる。

五、〈自己疎外〉への自覚

ここでは、〈自己疎外〉を自覚せざるを得ない「私」に注目したい。例えば、「2」に次の箇所がある。

私は疲れてゐた。それから溪へ下りてまだ三四丁も歩かなければならない私の宿へ帰るのがいかにも億劫であつた。(中略)彼等が今から上り三里下り三里の峠を踰えて半島の南端の港へ十一里の道をゆく(中略)。それにしてはなんといふ不似合な客であつたらう。私はただ村の郵便局まで来て疲れたといふばかりの人間に過ぎないのだつた。(2)

ここで、自分を他の乗客と見比べるという「私」の行為に注目したい。衰弱している「私」の〈視点〉が自分と違って健康そうな乗客との〈落差〉に向かうことで、〈心〉の中で「不似合な」自分と感ずるのである。つまり、ここで「私」は〈疎

外感〉を感じざるを得ないのである。同じことは「2」の終わりにも見出せる。「娼家」での場面を見てみよう。

私は疲れた身体に熱い酒をそそぎ入れた。しかし私は酔はなかつた。酌に來た女は秋刀魚船の話をした。船員の腕に相應しい逞しい健康さうな女だつた。(2)

ここでは、「私」は「酌に來た女」を〈異性〉としてよりも、むしろ「逞しく」「健康さう」と認識している点が重要である。また、その女を切っ掛けとして「腕」の逞しい「船員」の存在が意識されるのである。このように、自分と違つて健全な「女」や「船員」の存在によつて〈自己疎外〉を自覚せざるを得ないと思われる。更に、傍点部の「不似合な」「私」ではなく「船員の腕に相應しい」という言葉が見られる。そのような言葉が相手である乗客たちや「船員」たちとつり合いがとれない「私」の姿を照射し、「私」の〈疎外感〉を強調するのである。それによつて、「不似合」である「自分自身」や「病人である私」の「腕に相應し」くないと痛感する「私」の〈劣等感〉を暗示し、あまり語られていない「私」のパーソナリティーの一面を表していると考えられる。

おわりに

この作品の主題について、代表的な見解は以下のようである。

・「冬の蠅と似ている自分のはかない存在に気づき、否応なしにのめりこんでゆく死の運命の戦慄をえがこうとしたのだ。」⁽²¹⁾

・「冬の蠅が自分自身の将来を象徴していることを痛感したことが結論的に冬の蠅の主題になっていると思われるのである。」⁽²²⁾

相馬氏や鈴木氏の論をはじめ多くの論は、〈冬の蠅〉と似ている「私」の〈死〉と読んでいる。しかし、ここで本作品の主題について改めて考える必要があると思う。作中に「私」と〈冬の蠅〉の類似点が幾つかあることは言うまでもない。とは言え、本作の主題が「私」の「死の運命の戦慄をえがこうとした」こと、乃至は「冬の蠅が自分自身の将来を象徴していること」だけにあるとは限らない。このような先行論の論拠は、「いつか私を殺してしまふきまぐれな条件があるやうな気がした」という「私」の認識に依拠しており、それを作品のテーマに直結させている。しかし、主人公の「私」の認識をそのまま作品のテーマだと結論付けるのはいささか早計ではなからうか。

ここで強調したいのは、先ず寒い夜の山中で「わが身」を苛んで歩き出す「私」の行為が、自殺の試みとして解釈するのではなく、寧ろ自分の「疲労」を「快く緊張し新しい戦慄」に改変するための行為であることだ。抑圧されている〈心〉をこのような方法によって自分なりに「解放」するのである。

終章で、「いつか私を殺してしまふきまぐれな」「其奴」があることを空想したり、またそれが「私の自尊心を傷つけ」たりすることから考えれば、恰も「私」が〈独り相撲〉をとっているようである。そのような〈心的〉な差し障りとしての〈空想〉が、後に「私」の現実的な行動に影響を与えるのである。それは、「其奴」に対する抵抗としての「彼等から一篇の小説を書かうとしてゐる」という「私」の行為に窺うことができる。したがって、末尾に見られる「私」の〈内的〉な葛藤に、これからの負けない「私」の〈原動力〉が内在していたのではないかとと言える。

以上に見てきたように、寒い夜の「山中」で〈心〉の「解放」を歩き求めたり、単調な養生生活で自分の好奇心をそその〈冬の蠅〉が死んでも、新しい対象としての「小説を書く」くことを見つけ出したりすることは、如何に主人公の「私」が〈生〉を必死に追求しているかを明示している。本作の主題は、「其奴」にあえて立ち向かつて負けない「私」の姿を描くことにあるのではないかと考えられる。

注

(1) 中谷孝雄氏は、『梶井基次郎』(昭和三十六年六月、筑摩書房)において、「この作品を梶井の小説(しばらく散文詩風のものを除く)のなかで最もすぐれたものと思っているが、当時の文壇はこの作品に対しても甚だ冷淡で、公的な場に於いて批

評したものは一人もなかった」と述べ、高く評価している。

- (2) 磯貝英夫氏は、『現代日本文学大辞典』(昭和四十年一月、明治書院)の「梶井基次郎」の項において、「全作品中で最も酷烈な心象の写しだされている作品」、「冬の蠅の生態や自然の明暗の見事な描写といった側面においても、これは最も結晶度の高い作品のひとつ」だと高く評価を与えている。

- (3) 篠内利映「梶井基次郎『冬の蠅』論——『書き手』の叙述行為について——」(『國學院雑誌』、二〇〇二年)

- (4) 前掲3 篠内利映氏論。

- (5) 福永武彦『近代文学鑑賞講座 第一八巻 中島敦・梶井基次郎』(昭和三十四年一二月、角川書店)

- (6) 相馬庸郎「主題の把握——冬の蠅・梶井基次郎」(『国文学』、一九六八年七月)

- (7) 勝呂奏「冬の蠅」覚書(『静岡近代文学』一九八七年七月)

- (8) 鈴木二三雄「冬の蠅」(『国文学解釈と鑑賞』、一九九九年六月)

- (9) 萩原朔太郎「二つの手紙」『散文詩・詩的散文』所収(『萩原朔太郎全集 第三巻』筑摩書房、一九七七年五月)

- (10) 萩原朔太郎「薄暮の部屋」『青猫』所収(『萩原朔太郎全集 第一巻』筑摩書房、一九七五年五月)

- (11) 濱川勝彦「梶井基次郎における『闇』——『闇の書』から『闇の絵巻』へ——」(『奈良女子大学叙説』、一九八五年一〇月)

- (12) 黄地桃子「梶井基次郎『冬の蠅』論——『闇』の認識を視座として——」(『百舌鳥国文』、一九九七年一月)

- (13) 鈴木靖浩「冬の蠅」論(『文学論藻』六十号、一九八六年二月)

- (14) 渡部芳紀「冬の蠅」論(『解釈と鑑賞』、一九八二年四月)

- (15) 中沢弥「梶井基次郎と海のイメージ——湯ヶ島時代の作品から」(『文芸と批評』、一九八六年八月)

- (16) 前掲13 鈴木靖浩氏論。

- (17) 『大辞泉 増補・新装版』(松村明監修、小学館、二〇〇六年)

- (18) 前掲6 相馬庸郎氏論。

- (19) 前掲12 黄地桃子氏論。

- (20) 飛高隆夫「梶井基次郎ノート——『冬の蠅』をめぐって——」

- (『大妻女子大文学部紀要』五号、一九七三年三月)

- (21) 前掲6 相馬庸郎氏論。

- (22) 前掲8 鈴木二三雄氏論。

- 【付記】本文の引用は筑摩書房刊『梶井基次郎全集一巻』(昭和四十二年六月三十日)に拠った。

- (アブデュルマクスード・ワイル／本学大学院博士後期課程)